学校教育実践コース（社会科教育）、外国史Ⅱ／人間社会デザインコース、ヨーロッパ形成史

ヨーロッパとは何かーアイデンティティ形成の過程ー

—Europe in History: the making of European Identity−

森　貴子（西洋史）

1. 講義の概要

2017 年度後期・水曜日２限開講の外国史Ⅱ（人間社会デザインコースでは、ヨーロッパ形成史）は、三回生以上を対象に、上記タイトルで開講された。学期末試験受験者数は 13 名（社会科教育４名、人間社会デザインコース９名）であった。なお、比較によって今年度の達成度を見極めるため、昨年に続いて本科目を授業評価の対象とした。

(1)講義の目的

本講義は、ヨーロッパやネイションといった集団が、そのアイデンティティも含めて歴史的に構築されたものであるとの認識に至ることを目標としている。

この目標を達成するために、「ヨーロッパとは何か」という問いを設定した。その空間としてのまとまりは如何にして形成され、また如何なる歴史的性格を持つのか。本講義では、こうしたヨーロッパ意識の形成過程を、いくつかの具体的事例を取り上げつつ長期的視点から検討した。そしてそこから、地域的アイデンティティの複層性や変容、アイデンティティ形成における歴史の役割、そして「他者」の重要性などを明らかにした。

こうした認識を得ることは、ひいては、近代国民国家の成立以来我々を強烈に縛り付けてきた「ネイション」の相対化に繋がると同時に、紛争をはじめとした現代世界の諸問題を考える際の、糸口にもなると考えている。

(2)講義の詳細

授業は、基本的に、講義形式で行われた。まずはなぜトルコは EU に入れないのか、その場合の「ヨーロッパ」とは何なのか、EU を脱退しようとしているイギリスの「ヨーロッパ」での位置付けはいかなるものか、などの問いかけをしたうえで、①古代ギリシアにおける異文化受容と近代ヨーロッパにおけるその否定(古代ギリシアの理想化)、②中世におけるヨーロッパ意識の勃興とその内容、③ヨーロッパ各地域におけるゲルマン的要素とローマ的要素の併存、④キリスト教(カトリック)＝ヨーロッパの形成におけるギリシア正教の役割、⑤「他者」としてのビザンツ帝国、オスマン＝トルコ、⑥地域紙幣（イングランド銀行発行紙幣に対するスコットランドとアイルランドの立場）とアイデンティティ、といった内容を扱った。

資料に関しては、各回の内容に沿った史資料を可能な限り準備し、学生の理解を手助けすると同時に、映像資料も利用した。

２．授業評価の内容と結果

授業評価は、学生に無記名アンケートを実施し、その結果にコメントを付すことで行うこととした (2017 年 1 月 31 日実施)。アンケート回答者は当日欠席した１名を除き（社会科３回生)、学期末試験受験者の人数・所属と一致している（計 12 名)。

問 1～６は、次の五段階で評価してもらい、下表のような結果を得た。

＜評価基準＞

５：強くそう思う（非常に良い）
４：ややそう思う（良い）
３：どちらとも言えない（普通）
２：あまりそう思わない（あまり良くない）
１：全くそう思わない（良くない）

＜問い＞

問１：この授業への出席状況は
問２：授業のテーマ・目的は、明確でしたか
問３：担当教員の説明は分かりやすかったですか
問４：配付資料・映像資料は有用でしたか
問５：授業の内容・レベルはあなたにとって適切でしたか
問６：授業によって考え方が培われたり、得

るところがありましたか

評価	5	4	3	2	1
問1	5	5	2	0	0
問2	10	2	0	0	0
問3	9	3	0	0	0
問4	10	2	0	0	0
問5	5	6	1	0	0
問6	9	3	0	0	0

＊問4に対するコメント：ギリシャのビデオが面白かった

◎ 問7～9は記述式で回答を求めた。以下、紙幅の制約上､内容を整理して取り上げる。

問7　この授業で良かったと思う点、印象に残った点を挙げてください。

ヨーロッパ・アイデンティティの形成過程を理解できた（4 人）／最初のビデオで授業に入り込めた（3人）／資料がたくさんあり、分かりやすかった（2人）／アイデンティティの操作性／ヨーロッパに対する知識が深まった／アイデンティティが紙幣に表れていることが印象的／古代や中世のことばかりでなく、EU など、最近の話があった点

問8　この授業で改善すべき点を自由に挙げてください。

板書の量が多い（2人）／板書の番号がバラバラなので統一してほしい／地域ごとに取り上げられていたため、いつの時代の出来事なのかわからない時があった

問9　この授業を受講して、我々の生活している地域社会（日本や四国、松山）とアイデンティティとの関係について、考えたり調べたりしましたか。

自分や日本のアイデンティティについて考え直した（2人）／新聞やニュースでよく意識するようになった／試験の解答のために調べた／私の帰属意識は、地域社会以上に日本に対しての方が強い／まだ調べていないが、世界のいろいろな地域のアイデンティティについて興味が湧いた／少し調べた／調べたり考えたりしていない（2人）／無回答（3人）

3．授業の達成度―昨年度との比較と今後の課題―

まず言えることは、昨年度と比べて、今年度のアンケート結果が良かったことである。例えば、授業レベルの適切さに関する問5では、昨年度は約半数の学生が「3：どちらとも言えない」あるいは「2：あまりそう思わない」を選択しており、コメントから推察すると難しいと感じていたようである。これに対して今年度は、「5：強くそう思う」及び「4:ややそう思う」に回答が集中しており、授業の内容・レベルが適切と評価されたことになる。このアンケート結果は学期末試験にも反映されており、昨年度よりも今年度の成績の方が平均してかなりよかった。こうした変化の要因として、今年度は授業で扱う内容を限定し、比較的時間に余裕を持たせて話を進めたことがあったように思う。この推測を裏付けるのが、教員の説明の仕方を尋ねた問3の回答で、やはり昨年度より高評価を得ていることである（昨年度は3名が「3：どちらとも言えない（普通)」を選択)。板書についてはまだ指摘があり、引き続き改善に向けて工夫する必要がある。

4.「地域社会を核とした教育と研究のつながり」について

本講義の最終的な目標は、ヨーロッパに関する研究成果を学ぶことで、地域に生きる自分自身のアイデンティティを問い直す姿勢、そしてそこから、他集団のものも含めて、アイデンティティの歴史性を自覚する態度を育成することである。アンケートの問9は、これに関連した質問である。問7のコメントも含めて、回答が昨年度よりはバラエティに富んでいることから、受講生がアイデンティティについて自分なりにあれこれと思考したことが伺える。しかしそこから、日本や愛媛という「地域社会」に生まれた自分のアイデンティティを客観化し、地域的アイデンティティの複層性や変容、その形成における歴史の役割といった授業で学んだ論点を、自らに引きつけて考える姿勢が育ったかどうかについては、判断できない。学んだことと自分の周りの世界とを繋げて理解できる思考様式・態度を育成し､その到達度を判断するためには、授業のなかで様々な｢地域問題｣を取り上げ、受講生に自分の考えを表現させる時間を設ける必要があろう。また、授業評価のためのアンケート項目についても、アイデンティティについての受講生の考えを、より具体的に把握できるような工夫を施す必要を感じている。